明石市林崎漁港における漁港空間の研究

平本　明子

キーワード：漁港整備長期計画，ノリ養殖，環境整備

1．はじめに

漁港は、漁業の根拠地及び漁村等地域社会の核としての機能を有する、水陸両面にわたる施設の総合体であって、漁港法（昭和25年制定）に基づき指定されたものをいう。このため漁港は、漁船が安全に入港でき、停泊や係留に必要な十分な広さの水面を持ち、漁獲物の陸揚げ・荷捌き・加工等の機能を持つ、海と陸との結節点・水産物流通の拠点といえる。

兵庫県の漁港は、防波堤・水域・岸壁・用地等の基本施設の整備については着実に進展しているが、十分とはいえず、今後なお安全性・機能性の確保に努める必要がある。明石市には，松江港・藤江港・魚住港・林崎港の計４漁港と、明石港・江井ヶ島港・二見港の計３港湾があり、また、東から東明石浦・明石浦・林崎・江井ヶ島・魚住・東二見・西二見の計７漁協がある．ここでいう港湾とは、漁業のみを目的とした漁港とは異なり、漁業及び船の停泊や乗客・貨物の揚げ下ろしなど多目的に利用される水面である。

現在15枚に１枚は明石産のノリが流通していると言われるほど、明石ではノリ養殖が盛んであり、その中でも林崎漁協は、単独漁協のノリ生産量において全国１位の座を占めている。また、その他の漁業についても林崎漁協は７漁協の中で、明石浦漁協に次いで漁獲量が多い（図１）。このようなことから、林崎漁協の拠点である林崎漁港は明石の中核的漁港であるといえる。

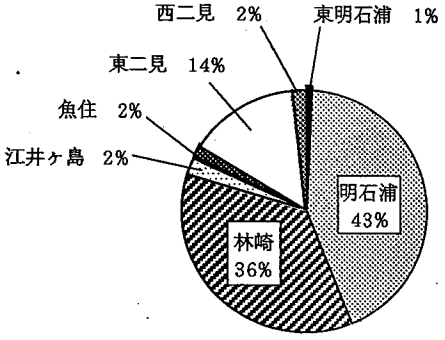


図１　明石市における漁協別漁獲量
出典：明石市経済部農水産課『明石の水産業』より作成

2．研究の目的

本研究では、明石市林崎漁港における漁港の空間的変遷及び特徴を研究することを目的とする。

明石市の漁業は、古くより「明石ダイ」や「明石ダコ」などで全国的に有名であるが、その生産基盤となる漁港自体が、時代的な流れとともにどのような変遷を遂げ、その特徴を形成してきたのか、また時代が進むにつれて今漁港に求められているものは何なのか、どのように変わっていくべきなのかということを、林崎漁港を例に時代的な背景とその必要性という点に着目しながら考察していきたい。

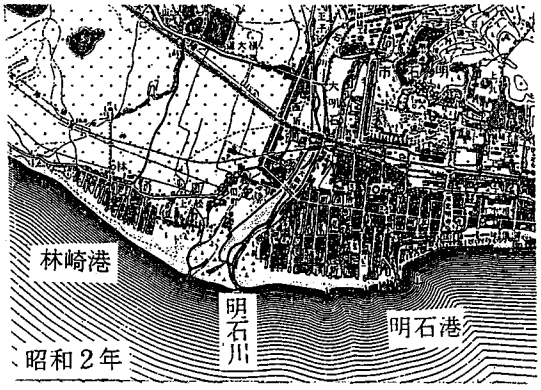
3．位置

林崎漁港は、兵庫県瀬戸内側にあり、播磨灘と大阪湾を結ぶ明石海峡の北岸に位置し、南は潮流の早い明石海峡を隔てて、淡路島の北端を一望でき、海岸線は出入りが少なく単調である。また、漁港によく見られる辺地や、飛び地などの地形ではなく、すぐ近くに住宅地や県道もあり、比較的解放性に恵まれている。

4．林崎漁港の変遷と特徴

(1) 明治期までの林崎漁港

林崎漁港の歴史は非常に古いが、文献に見られる漁港設備は明治43年に組合施行により築造された突堤３個が最初である。昭和初期までは、漁港といってもほとんど自然の海岸や浜でしかなかった（図２）。また蛸壺漁やイカナゴ漁が非常に盛んであった一方、明石海峡一帯は潮の流れが速く、海難が相次いでいた。この相次ぐ海難を打破しようと、村民は様々な施行錯誤をしたが、財政上の面からも難しく、なかなか漁港の設備は整えられなかった。



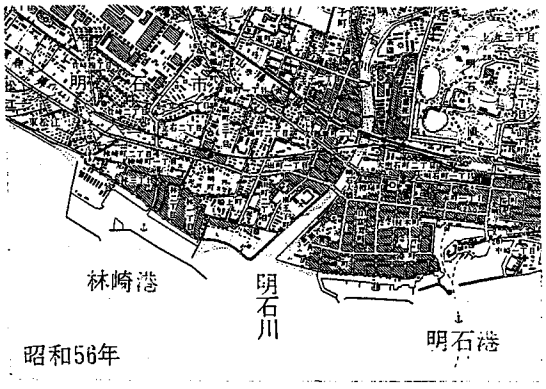


図２　海岸線に見られる林崎漁港の変化

出典：２万5,000分の１地形図「明石」を50％縮小

(2)林崎漁港の近代化

(ｲ)林崎漁港の新築

林村の漁業者は漁港としての設備を独自で確立しようとしていたが、財政上の面からも防波堤などの防災設備を整えることは困難であった。そこで、林村は昭和初期に県当局に港湾建設を懇請している。

県や国により、公的に漁港の設備が整えられ始めたのは昭和８年になってからである。この新築工事により防波堤や港口などが設けられ、昭和初期は専ら漁港の基本設備の充実による海難防止と漁村の進展などが目的とされた。

(ﾛ)漁港整備長期計画による整備の開始

昭和25年７月25日に施行された漁港整備長期計画は、漁業法に基づく漁業の総合的な整備を図るための計画である。この計画は第２次世界大戦後の食糧不足に対応するため、漁業の生産基盤である漁港に関する基本法として施行された。

昭和26年になると、林崎漁港は農林省より第２種漁港に指定され、漁港整備長期計画による本格的な漁港整備が昭和28年より開始された。この整備では既存の設備の改修や修築、また第２次計画では斜路を砂地からコンクリートに改修し、漁船をウインチで引き上げるようにするなど、安全性と機能性の充実が図られた。

(3)ノリ養殖特化漁港

昭和38年の大冷害により林崎漁港は新たな転機を迎えることとなる。この大冷害でタコが大打撃を受けたことにより、蛸壺漁が盛んであった林崎漁港では生計が立てられず丘に上がる漁師も多かった。この漁業不振の打開策としてノリ養殖漁業が開始され、林崎漁港はノリ養殖漁業に特化した漁港へと変化していった。図３は明石市全体のノリ生産量を表しているが、この中でも大きな割合を占めているのは林崎漁港であり、平成９年には生産量のうち約44％を林崎漁港が占めている。

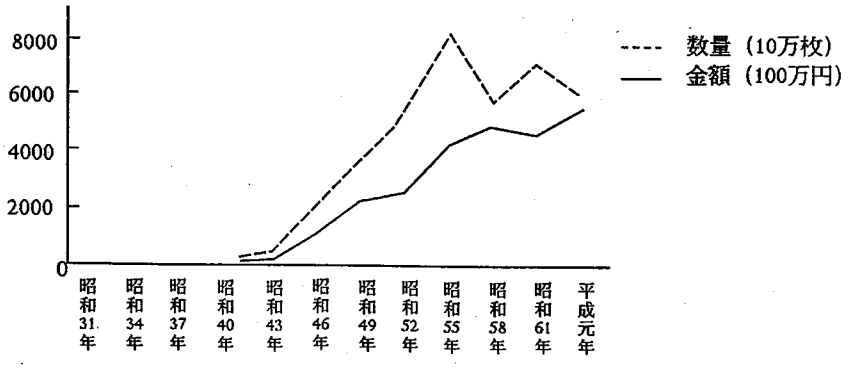


図３　明石市のノリ生産量・生産金額の推移

出典：林崎漁業協同組合提供資料より作成

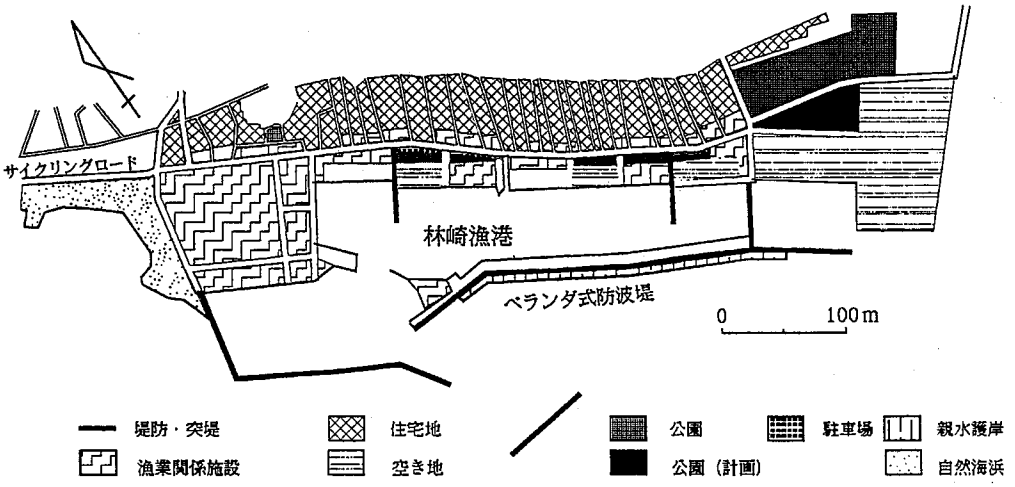


図４　第９次計画に見る林崎漁港の土地利用

出典：第９次漁港整備長期計画　林崎漁港改修計画平面図より作成

昭和40年代には第４次計画でノリ加工用地の確保のために埋立地が造成されたり、昭和60年代に入ると、ノリの刈り取りが自動でできる漁船の出現などによる漁船の大型化や木船のＦＲＰ（プラスチック船）化に伴い、第７次計画で斜路が直立の岸壁へと改修され突堤も造られた。この岸壁には消波作用のある特殊ブロックが使用されている。また、第８次計画では幅15mもあるベランダ式防波堤が新設され、より一層の安全水域の確保が図られた。

５．漁港環境整備事業

現在行われている第９次漁港整備長期計画では、ふれあい空間の創出や美しい海辺環境の保全と創造など、地域住民との交流の場を設けるべく環境整備事業が行われ、公園緑地化計画や駐車場の設置、ベランダ式防波堤を利用した親水護岸の設置などが行われている（図４）。

６．結論

林崎漁港は自然漁港から近代的漁港へ、そして現在のノリ養殖に特化した漁港へと、現在までに３段階の変化を遂げてきたと言える。

自然漁港ではほとんど漁港設備は見られず、近代的漁港では主に安全性と機能性の充実が図られた。また、ノリ養殖に特化した漁港では昭和40年頃から軌道に乗り始めたノリ養殖を支える形での漁港整備が行われた。

近代漁港への整備においては、昭和６年の国の貧窮救済策や第２次世界大戦後の食料不足による漁業の生産基盤の見直しなどにおける公的助成がきっかけになっていた。またノリ

養殖に特化した漁港へと変化してきたのは、冷害による漁業不振が起因となっている。このように漁港の変遷は常に時代の必要性に迫られてなされてきたと指摘することができる。

そして，現在行われている漁港環境整備事業も、地域の人々との交流を深めることによる漁業の生産基盤である漁港の見直しや、それに伴う後継者不足の解消、また自然環境や景観に対する国民的関心の高まりなど、時代的な必要性が背景にあると考えられる。また角度を変えて漁港の環境整備事業などが行われることで、林崎漁港は今までのような隔離された空間ではなく、利用価値の高い多目的で開放的な空間へと変化しつつあると考えられる。

参考文献

林村漁業組合：『林崎港新築の概要』三協商会　p.10

兵庫県農林水産部漁港課(1998)：『漁港漁村の整備について』兵庫県農林水産部漁港課 p.1

兵庫県農林水産部漁港課(1995)：『兵庫の漁港』神戸新聞総合出版センター　p.26-27

山口　恵一郎（1997）：『日本図誌体系　近畿篇』朝倉書店　p.174